

保育留学による学生の精神的変化と成長

Mental Change and Growth of Students Who Participated in Abroad Childcare Study

松崎 真実ⁱ⁾ 石川 悦子ⁱⁱ⁾
MATSUZAKI, Mami ISHIKAWA, Etsuko

Abstract

The purpose of this study is to examine the psychological changes and growth of students through childcare study by two indicators, and to examine the significance of overseas childcare study and its educational effects. The first measure is an analysis of a survey of interviews with students studying in childcare, and the second measure is a comparison of scores on the SEQ before and during study abroad. Through these results, it became clear that in adapting to the new environment of study abroad, camaraderie and mutual support among students were strengthened, and at the same time, uniqueness was manifested. However mental changes were made through each milestone experience. Changes in the content of student interviews indicated that stress and concern change at each stage of study abroad. On the other hand, in response to such changes in it, all four items (Self-efficacy, achievement motivation, energy, optimism) that constitute the “energy generating ability” of the SEQ score increased, which is supported by the increase in social behavior along with mental growth. In addition, trait anxiety also increased, indicating an increased tendency to actively engage in various things without feeling unnecessarily anxious or worried about the present or future.

キーワード：保育留学、精神的変化、Uカーブ仮説、SEQ

I 問題と目的

1. 留学をめぐる状況

2019年度末から続いたコロナ禍が明け、全世界にまた以前のような活発な行き来が戻ってきている。2023年、日本政府は従来の留学生30万人計画に代わり、2033年までに外国人留学生の受け入れ数を40万人、日本人学生の海外留学生を50万人にする目標を掲げた。しかしながら、コロナ禍前のような海外への行きやすさが戻ったかと言われれば、完全に回復したとは言えない。法務省出入国在留管理庁の速報値によると、2023年8月の日本人出国者数は1,201,247人で、7月よりも31万人増加した。これにより前年同月（2022年8月）の386,412人と比べると+210.9%（約3倍）の増加となるが、2019年の211万人と比較すると-43.1%の状況である。また、このような状況下、海外留学のみならず、海外旅行など国外に出かけたことのない若者が増えている。長能ら（2009）

によれば、海外旅行経験のない人の半数が海外旅行に対してネガティブな反応をするという。さらに若者の海外に行きたがらない理由のひとつである「余暇時間の少なさ」について、たとえ余暇時間の増加があっても価格効果や所得効果などの時間要因がより大きいために、他の余暇活動に時間を費やすのではないかという示唆もある。このように時間や経済的要因だけではなく、海外未経験の若者の増加により、海外留学が大学生にとって挑戦しやすい状況にあるとは言い難い。加えて、太田（2014）は留学に関して次の点を指摘している。「交換留学や認定留学を通して、海外の大学で修得した単位が、日本の大学では単位認定されにくいという問題がある」「学生は、自大学で提供されていない科目こそ、留学先で履修したいと望むが、そのような科目は単位認定の対象外になってしまう。認定単位数が少ないということは、4年間で卒業できないことを意味しており、それが学生にとっては、大きなデメリットとしてとらえられている」。

以上のような課題はあるが、しかしながら、海外経験は自己研鑽のきっかけとなる。文部科学省委託事業「日

i) こども教育宝仙大学 専任講師

ii) こども教育宝仙大学 教授

本人の海外留学の効果測定に関する調査研究」(学校法人河合塾, 2018)は、海外留学支援制度(JASSO)、トビタテ!留学JAPAN日本代表プログラムのアンケートから70,915人分の結果を報告した。まず、留学に関する基礎調査では、留学に関する事前研修が充分あった学生、留学中にインターンシップを経験した学生、海外経験の豊富な学生であるほど留学満足度は高い。また、奨学金等については「(支援制度が無くても)留学した」と答える学生の割合が経年で低下傾向にあり、即ち、留学を加速させるための金銭的支援の重要性が経年で高まりつつあることが示された。さらに「留学前後の能力の伸長度」に関する23項目への回答結果(対象は平成28年度海外留学支援制度(JASSO)学生アンケート14,280人、トビタテアンケート632人)によると、「積極的に発信できる」と「留学先の社会・習慣・文化に関する知識がある」の項目において伸びが大きかったことが報告されている。

以上の報告等からも、多くの学生が留学経験を通して自分の能力が高まったと自己評価しており、留学によって精神的な成長効果があると考えられることができる。留学は語学力や多文化理解の伸長だけでなく、積極性、他者との関係、多様性の受入れ、ストレス対処など精神面での大きな成長の鍵となり得る。

その一方、新しい生活を異なる文化の中で行う留学は、学生にとって良いことばかりとは言えない。川岸(2014)によれば、留学し学業に励むことは、個人に実際的な語学力の向上や業績といった実際の成果のみならず達成感や満足感をもたらす一方、危機的な状況に陥らせるとしている。現地の少ないリソースの中で、異文化に適応しつつ直面化した問題に対応する際には、適応できずに留学先で精神不調を来してしまう症例が散見され、長期ではうつ病や不安障害が多いのに対し、短期では急性一過性精神病性障害といった幻覚妄想状態を呈する症例が比較的多くみられることを指摘した。また、横田(2004)は、留学生は多くの課題を同時に抱える存在であり、学問的な課題を達成する必要があること、他の同年代の学生と同様に青年期特有の問題を抱えた上で、異文化に適応し、外国語を習得しなければいけないことを困難さとして挙げている。したがって、これらの課題を踏まえ留学をサポートするためには、所属大学と留学先が連携し、計画的・継続的なサポート体制の構築が重要と考える。

2. 本研究の目的

本学では2023年2月から12月まで、オーストラリアで11か月に亘る保育留学を行った。オーストラリアクイーンズランド(QLD)州ゴールドコーストにある専門学

校で学生は15週間の語学研修(英語コース)を受講後、29週間の保育留学プログラム(保育コース)に参加する。保育留学プログラムでは現地の保育園での実習や課題に取り組み、QLD州政府が要求する単位を全て修得する。単位の修得と実習が終わると、オーストラリアの保育資格であるCertificate III in Early childhood Education and Careが授与される。この資格を取得すると、オーストラリアの保育園で副担任として働くことができる。本学は、文部科学省海外学生支援制度学生交流推進タイプに採択され、この制度を一部利用しながら学生をオーストラリアの保育資格取得という明確な成果を目的とした留学に送り出している。本制度のように文部科学省は2013年より海外留学を支援するためのプログラムを打ち出し、幅広い分野の学生が留学できるよう様々な奨学金を用意している。本学の留学のタイプは、前述の国の調査研究(2018)の海外プログラムの類型化に当てはめると「長期留学×キャリア開発×自由選択型」となる。学内的には、11か月という比較的長期間の中で海外保育士として働くことが出来る資格取得のために、学生自身が希望し、学内選考を通過した者が行ける留学制度となっている。このように自分から留学を選んだ学生達は、多少のトラブルを経験しながらも前向きに留学生活を送っているが、それでも留学開始直後にはさまざまな葛藤を抱え、それを1つ1つ解決する過程を通して語学力やコミュニケーション力、折衝力、自己理解や他者理解の力を伸長させながら歩みを続けている。これらの成長を客観的に評価し、今後のサポート体制等を見直すことは非常に重要なことである。この留学の効果を検証するために、本稿では2つの手法を採った。1つは、留学中の学生へ「心情変化」に関するインタビュー調査を実施し、その結果をテキストマイニングによって分析し、異文化適応過程を検証したりスガード(Lysgaard, S.)のUカーブ仮説(後述)に照らし合わせながら、心情の変化を客観的に分析した。2つ目は、留学前と留学中(8ヶ月間経過)のSEQスコア(Student Emotional Intelligence Quotient)の比較検討を通して効果検証を試みる。これらによって、保育留学が学生の精神的な変化にどのような影響をもたらすのか考察する。

II 調査

II-1. 学生の心情変化に関わるインタビュー調査

1. 目的

留学生は海外で勉学に励む期間の間、自国にいただけでは得られない経験を積む。生活状況の変化は学生達にとって今までに想定していなかった出来事の連続でもあり、その中で日々、理解と適応をしていく必要がある。

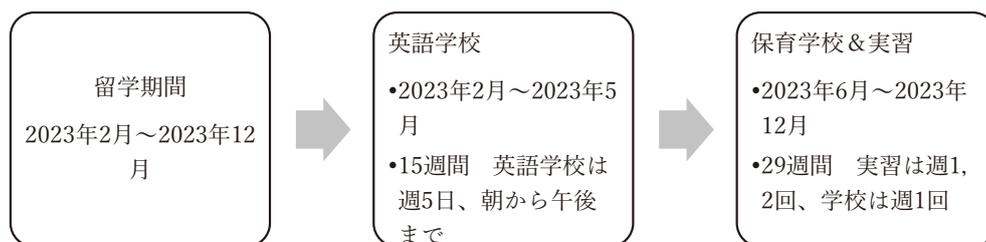


図1 保育留学中の学生スケジュール

林 (2017) によれば、英語圏への中期留学については、言語と心情面での肯定的な変化が実証されている。短期留学の言語面における効果については研究者間で見解が異なるが、心情面での肯定的な効果は多くの研究で実証されている。しかしながらその効果において、留学学生の英語能力や心情面での変化については留学前後のみで比較分析する傾向がある。留学中もその時期によって、心情変化は異なるものであるはずだが、その過程を詳細に分析しているものは少ない。

Lysgaard, S. (1955) は、アメリカに滞在したノルウェー人に対する異文化適応過程の研究で、滞在期間と適応との間にU字型 (U-shaped) の関係があることを発見した。これは、異文化適応過程のモデルの1つで、時間経過に伴って異文化への適応・不適応の程度がU字型に変化することを示すモデルであり、U字型をいくつかのステージに分類している。第1に異文化へ移動した初期の段階 (introductory stage)、第2にある一定の時間が経過して訪れる孤独の段階 (loneliness stage)、第3に孤独を克服し始める段階である。初期の段階はハネムーン期 (蜜月期)、孤独の段階はカルチャー・ショック期 (ショック期) と呼ばれる。留学生は保育留学という自分の専門科目についてオーストラリアで再度学ぶ。日本で既に実習を終えている学生は保育実習に自信はあるものの、やはり同じようにハネムーン期、カルチャー・ショック期が到来するのか、保育に携わる留学中に心的状況がどのような変化をもたらすのかも着目したい。

学生は留学してからも、毎月2回、本学教員とオンラインを用いて個人面談と集団顔合わせを行っていた。学生達から語られた留学生活への思いはその月ごとに大きく変化し、精神的に成長していく様子が見て取れた。また語学だけではなく保育留学プログラムが生活リズムに変化をもたらすことも想定された。学生のスケジュールは図1に記す。英語コース期間中と保育コースに移行した後は、生活面でも変化が生まれ、その違いが語りに影響を与える面も見られた。そこで本稿では、保育留学という資格取得を目的に渡豪した学生に対して、心情面の変化についてインタビュー調査を毎月行い、それに対してテキストマイニングを行い、KH Coderを用いて共起

ネットワークを作成する。テキストマイニングとはテキスト型の質的データからデータを抽出し、多変量解析を行うもので、インタビューなどの膨大なデータの中から関連性のある言葉の抽出ができる。また、抽出の後、共起の程度が強い抽出語 (出現パターンの似通った抽出語) を線で結んだネットワーク図を描画する共起ネットワーク分析を作ることができる。

2. 方法

2023年3月から2023年9月までの半年間、留学生たちは担当教員との個別面談と集団面談を毎月行った。個人面談は3月から5月は学業についての心配事、体調についての心配事、日常についての心配事を話す場としていた。6月からはそれに付け加え、就職の希望、卒業論文の内容も話した。質問は基本的には定型で質問順番は上記に沿って行った。学生の返答内容によってはその後質問が変化することもあった。集団面談では、その時の生活状況に合わせ、テーマを決めた話し合いと日本での連絡事項が主な内容として取り扱われた。この面談の内容について個人を伏せた状態で分析する事については、説明し、実際に資料を見せた上で同意書ももらっている。個別面談の方が学生の本音が出ることから、本研究では個別面談で得られた語りの内容を録音し、テキストにしたものをテキストマイニング分析し、共起ネットワーク (図2～図7) を示す。テキスト計量分析では、頻出語の抽出を行い、総頻出語の数と抽出数4語以上の言葉に対して分析を行った。共起ネットワークでは、出現数が大きいほど大きな丸を描くバブルにより、語りのコミュニティの分類と関連する単語によるパスで関わりを深さを探る。

3. 結果

(1) インタビュー調査における頻出語の変化

ここでは3月から9月までの面談で学生が話した語りの総抽出語数、異なり語数、頻出語から学生の変化を探る。5回の面談の頻出語は出現回数4回までを表1にまとめた。

表1. 抽出語リスト

3月		4月		5月		6月	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	14	思う	16	思う	14	保育	10
クラス	9	靴	14	生活	6	コース	8
ホストファミリー	8	海	12	体調	6	英語	7
生活	8	クラス	9	学業	5	思う	7
時間	7	家	7	感じる	5	希望	6
出る	7	体調	7	言う	5	体調	6
伝える	7	覆る	7	日常	5	学業	5
困る	6	ある	6	ベッド	4	実習	5
最初	6	学業	6	一緒	4	生活	5
体調	6	韓国	6			6月	4
シェア	5	今	6			ネラング	4
ハウス	5	困る	6			言う	4
学業	5	伝える	6			来る	4
自分	5	話す	6				
食べる	5	英語	5				
日本人	5	決まる	5				
お金	4	生活	5				
英語	4	難しい	5				
家	4	来る	5				
行く	4	オーストラリア	4				
人	4	学校	4				
単語	4	感じる	4				
文法	4	結構	4				
		出来る	4				
		紹介	4				
		大変	4				
		探す	4				
		中級	4				

7月（対面面談）

9月

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	34	来る	8	フィリピン	5	保育	15
英語	17	クラス	7	行う	5	学校	9
日本	17	感じる	7	困る	5	子	7
学校	14	指導	7	前	5	人	7
多い	14	週	7	行う	5	実習	6
保育	14	諸橋	7	困る	5	先生	6
行く	12	食べる	7	前	5	帰国	5
人	12	難しい	7	ほか	4	思う	5
子ども	11	本当に	7	活動	4	生活	5
先生	11	お金	6	感じ	4	12月	4
実習	10	アルバイト	6	希望	4	就職	4
課題	9	ドル	6	結構	4	週	4
月	9	悪い	6	好き	4	日本	4
言う	9	外食	6	最近	4	入る	4
友達	9	今	6	卒論	4	来る	4
オーストラリア	8	自分	6	日本人	4		
関係	8	授業	6	部屋	4		
帰る	8	就職	6	保育園	4		
気	8	洗濯	6	遊び	4		
生活	8	聞く	6				

■ 3月（オーストラリア滞在1か月以内）の面談の分析

オーストラリアに到着したのが2月中旬であり、この面談は1か月以内に行っている。総抽出語1702語、異なり語数502語である。学生の語りの頻出語を表1に示した。この時期、学生の語りに多く現れたのはクラス、ホストファミリー、生活、時間、伝える、困る等、日本とオーストラリアの文化の違い、生活の変化の為に驚いたことを表す言葉が多い。例えば、クラスは英語のクラス分けのこと、ホストファミリーはそれぞれの生活に順応することなどである。一方、次の生活に踏み出すための言葉も少し表出していることが分かる。例えば、シェア、ハウス、家等の言葉である。

■ 4月（オーストラリア滞在2か月）の面談の分析

総抽出語2424語、異なり語数703語である。滞在開始から2か月の時期の語りに多かったのは、学生が目の前の困りごとから生活に順応していく上で気づいてきたことに対する言葉である。例えば靴（実習に行くための靴をどこで買うかということ）、学校の近くで見ることが出来る海、クラスメートに多い韓国の話等である。学業面での言葉も引き続き多いが、少しずつ色々な言葉が出てきている。クラス、学業、話す、伝える、英語、学校等が英語学校を示す言葉であるが、それに付随した難しい、それとは全く逆の出来るという言葉も頻出している。

■ 5月（オーストラリア滞在3か月）の面談の分析

総抽出語1048語、異なり語数332語である。4月に比べて学生の語りの量が圧倒的に減っていることが分かる。個別面談は一人20分程度であるが、学生の語りが終わらないと延長し、逆にもう心配事はないと短い時間で終了する。5月の面談時間は総じて少なかったと言える。この時期、学生はホームステイからシェアハウスに移行し、新しい生活に慣れてきたころである。語りに多かったのは生活、体調、学業であり、4月に見られたような新しい生活に慣れるための言葉は頻出していない。ホームステイに関する語りもなくなり、代わりにベッド（シェアハウスでトコジラミが発生してしばらく大変だった）などシェアハウスの悩み事が出てきている。

■ 6月（オーストラリア滞在4か月）の面談の分析

総抽出語933語、異なり語数311語である。5月に続き、語りの量が減っている。学生全員が保育コースに移行したことで、保育という言葉の頻出が一番多い。コースというのも保育コースの話をして指している。しかしながら、まだ英語というキーワードが出てきており、これは引き続き学生が語学面での語りを必要としていることを指している。ネラングという保育の実習先の地名もあがっている。

■ 7月（オーストラリア滞在5か月）の対面面談の分析

本学は学生の保育実習期間中に実習巡回を行っている。その関係で7月期は対面面談となった。6月までは語りが少なくなっていた学生も顔を見れば今まで話せなかった語りが出た。総抽出語数3846語、異なり語数809語であった。面談時間も1人1時間程度と多かったが、それだけでは語りきれない顔を見たからこそその本音が聞けた面談でもあった。7月の面談で多く聞かれたのは日本という言葉だった。実際に教員の顔を見て、日本の友達や気候について懐かしそうに話す声があった。また、実際の生活での困りごとこの面談では多く聞かれ、異国で自立して暮らすことで、大学の友人との間に今までにはない感情が生まれたことも語りとして出てきた。

■ 9月（オーストラリア滞在6か月）の面談の分析

渡豪後半年となる面談は9月の初めに行った。8月初旬まで教員がオーストラリアにいたため、語りは少なかった。総抽出語数861語、異なり語数294語だった。この時期の語りで多かったのは保育実習のことだった。また保育を学ぶ学校のことも語りとして多い。12月の帰国のことも話に出始め、学生が帰国を踏まえた上で残りのオーストラリア生活について考えていることが分かる。

II-2. Uカーブ仮説による共起ネットワークの分析

1. 結果

Uカーブ仮説の留学初期段階＝ハネムーン期（蜜月

期）、孤独の段階＝カルチャー・ショック期（ショック期）、第3に孤独を克服し始める段階＝仮に「回復期」と命名する、を活用し、本学学生の変化を共起ネットワークと照らし合わせると、以下の点が明らかになった。

3月の時点では、1のバブルが示す新しい生活に対する語りが多い。その内容も一部「お金」など物価の違いに対するネガティブワードが含まれるものの、「大丈夫」、「自分」「伝える」等ポジティブなものがほとんどである。その他、英語のクラスに関するポジティブな3のバブル、次の生活ステージに対する語りのポジティブな4のバブルも目立つ。この時期はいわゆるハネムーン期にあたると思われる（図2）。

4月になると一番大きな1のバブルに「難しい」という語りが加わる。また、日本、日本人という言葉がそれぞれ「学校」や「家」、「英語クラス」とパスを結んでおり、学生自身の国籍に関する意識がそれぞれ色々な要素に影響を与えている事が分かる（図3）。この時期はハネムーン期の新しい環境に対するポジティブな語りというより、現実的に自分の英語力と向き合い、家を決める難しさに直面し、そのたびに日本人であることと向き合っていることで、困難さを感じ始めている。例えば、「ストレスを抱えたときは海を見に行く」などという発言もある。これらの様子から4月にはもうカルチャーショック期に移行していると考えられる。

5月の面談ではこの傾向はさらに強くなる。1の大きなバブルは英語学校について語っているが、語りの内容が「クラスへのストレス」「先生の発言」「レベルが低い」などネガティブな方向に向かっている。また英語学校にまつわる人間関係にも「上級に行くことができなければ、保育コースには行けない」と学生のストレスファクターである言葉が浮かんでいる。この時期は学生がホームステイからシェアハウスへ移行するタイミングに加えて、英語学校も最後の追い込み時期に入っていたことも大きな影響を与えている。そのためか3の新生活のバブルにも「大変」や「面倒」という言葉が出ており（図4）、5月でもカルチャーショック期が引き続き続いている事が分かる。

6月の面談になると、その様子は変わっていく。大きな1のバブルは学校生活についてであるが、この時期学生達は英語学校から保育留学に移行したこともあり、語りの多くが「保育コースは自由」「保育の英単語は難しいが頑張る」等ポジティブになる。それに引っ張られる形か、クラスに対して語る2のバブルも「無事に上のクラスに上がれる」などポジティブなものとなり、将来に対しての語りである6のバブルも「インターナショナルスクールへの就職を希望する」などこの時期から表れ始める（図5）。6月になると語りのポジティブさが急に

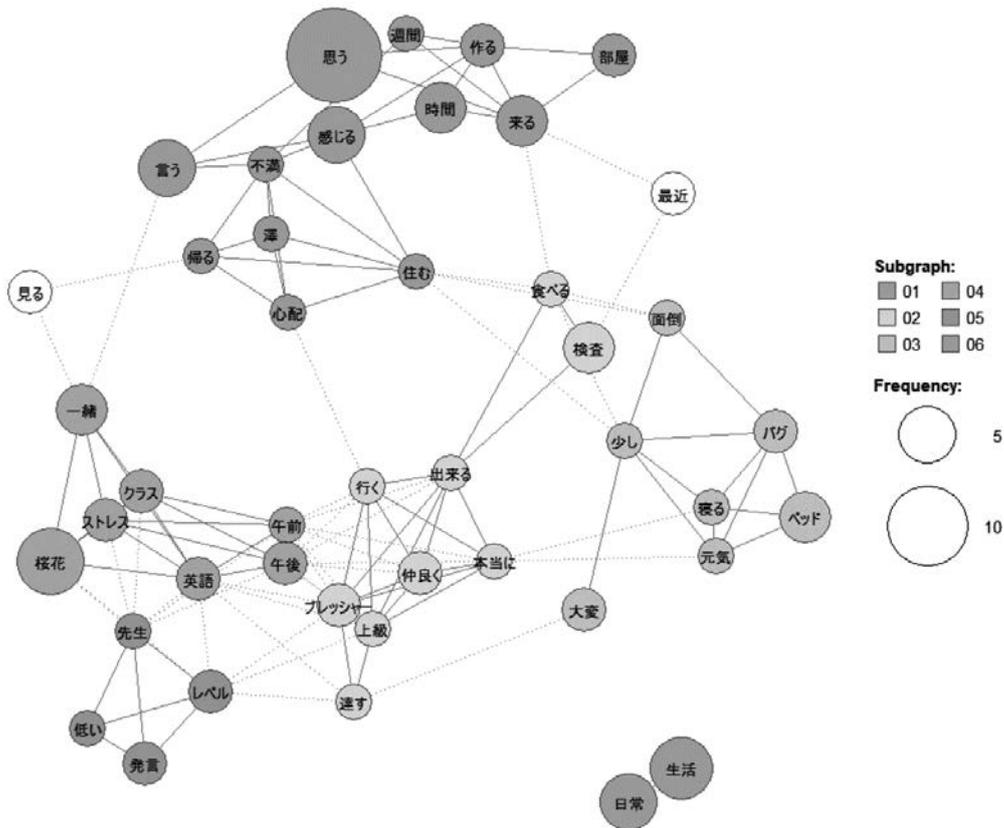


図4 5月の面談 共起ネットワーク分析

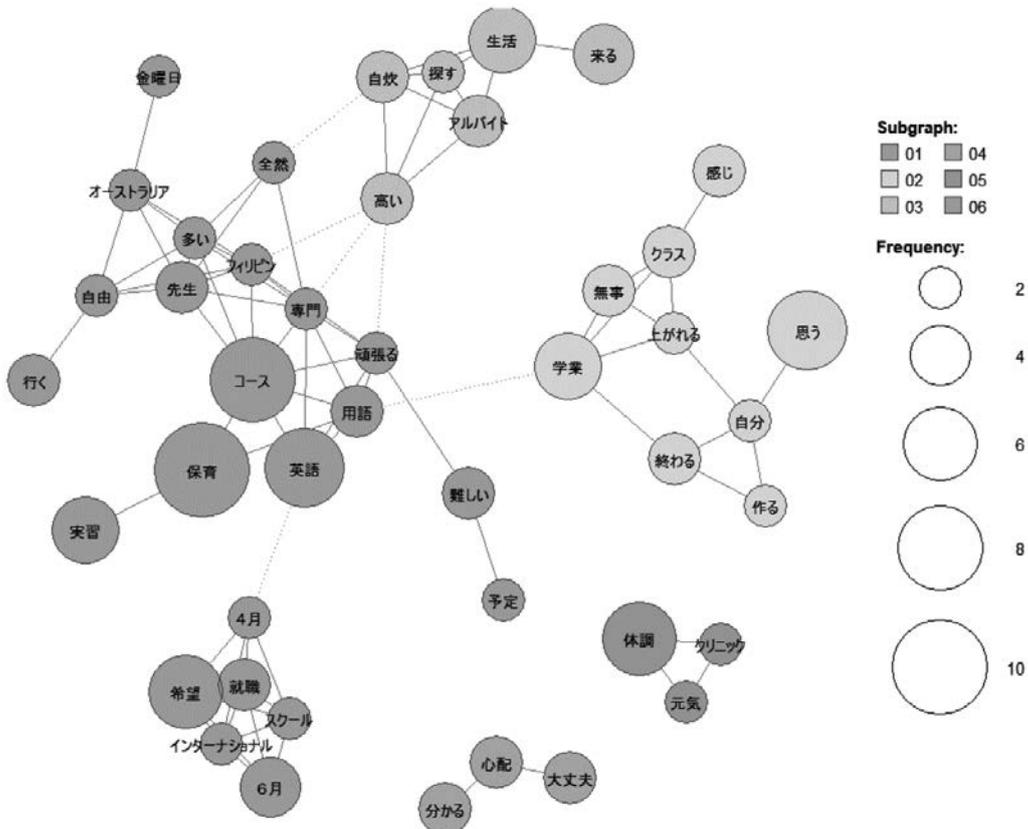


図5 6月の共起ネットワーク分析

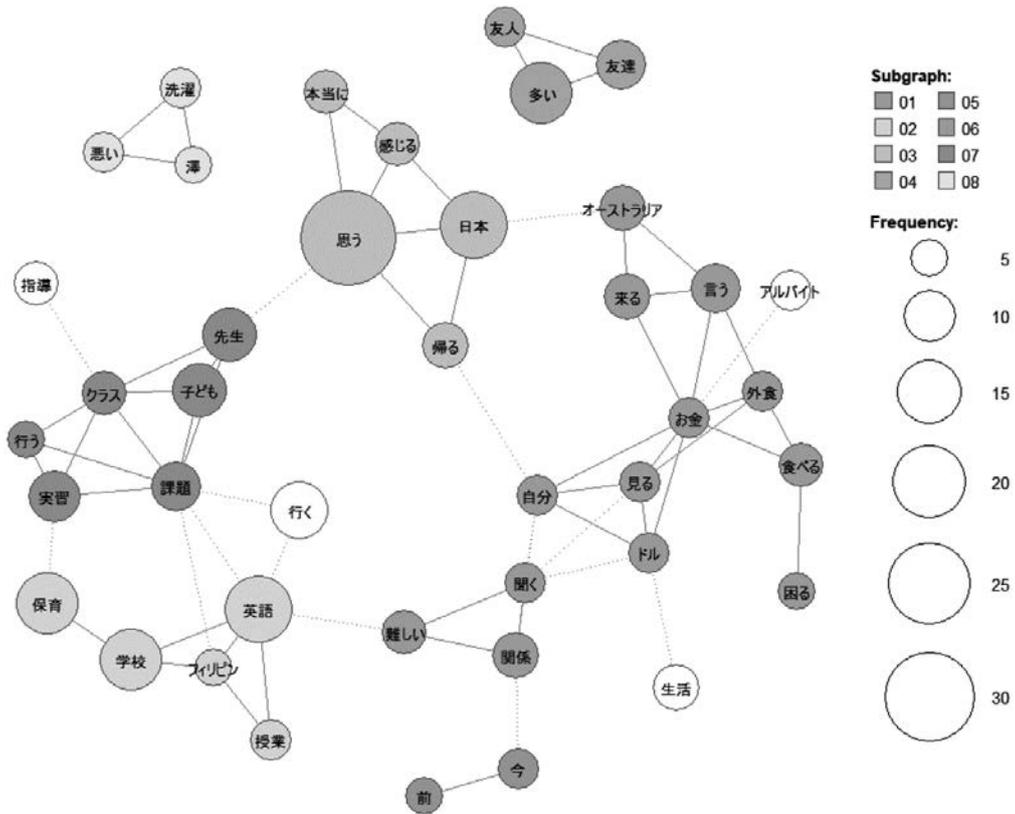


図6 7月の共起ネットワーク分析

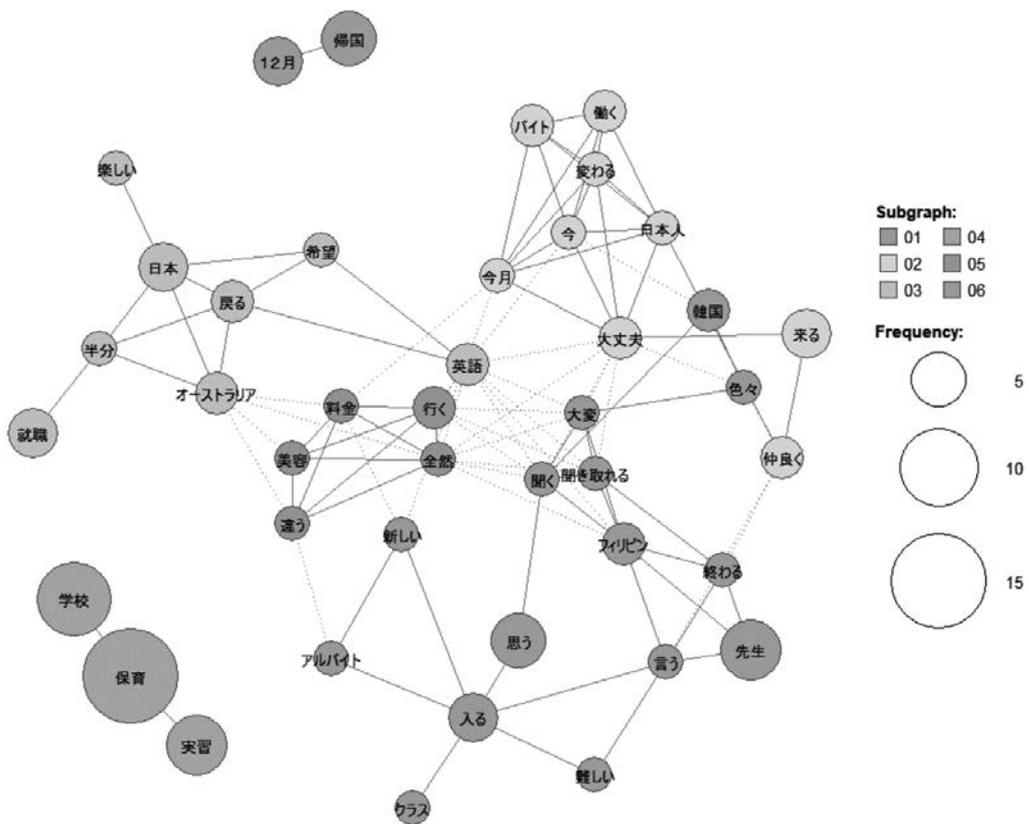


図7 9月の共起ネットワークの分析

増えたことから、Uカーブ仮説の回復期に入ったと考えられる。

7月の対面談では、教員と顔を合わせたことから語りが多くなったことは前述した。ここでは語りの多さから、やはりネガティブな生活面での問題に対する発言多く出た。しかしながら、1のバブルもオーストラリアに対しての現実的な語りである「お金」「外食」「ドル」「困る」等が見られるものの5月に多く見られたような「ストレス」「大変」「面倒」を表す語りは現れない。4のバブルでは友人が多く出来たことについての語りなどポジティブな語りが目立つ(図6)。語りが多くなると、対面でないと語れなかったものが出てくる。しかしながら7月の面談においても、語りは現実的で客観的なものであり、「前と今は友人関係が変わってきて、その難しさは感じているが気にしていない」等の発言もあり、人間関係の割り切りと前向きな傾向が見られた。この時期も回復期であると考えられる。

留学半年がたった9月の共起ネットワークで一番大きい1のバブルはやはり学校生活のことであった。「保育コースの先生の話す内容が難しい」というネガティブな語りがある一方、「聞き取れるようになってきた」「クラスにフィリピンのクラスメートの助けを借りて入ることができる」というポジティブな発言もある。次に大きなバブルである2は生活やアルバイトについてであり、アルバイト経験が学生の自信を後押ししている事が分かる。そのためか「大丈夫」「仲良く」「変わる」などポジティブな発言が多かった(図7)。また、この時期から帰国についての発言が出始めている。回復期は続いていると考えられるが、帰国後の生活を意識し始めていることが分かる。

2. 考察

学生の3月から9月に亘る面談をテキストマイニング分析することで、それぞれの面談の中では気づかなかった変化が分かった。第1に留学開始からの時期における総頻出語数の差である。不安に思っていることが多い前半はやはり語りが多く、徐々に減っていく。対面談を行うと、オンラインでは語られなかった思いが出てくることで、学生の思いがより鮮明に見えてくる。学生をサポートする大学側としても、学生がオンラインでは語れない思いがあることを理解し、学生がサポートを必要とする時期に教員を派遣するなどのケアが求められる。

第2に共起ネットワークとUカーブ仮説で捉えた「学生がサポートを必要とする次期」についても、今回のインタビューから知見が得られた。留学最初の3月まではハネムーン期にあたり、学生の気分も浮き立っているので、この時期は現実的な生活面でのサポートは必要であ

るが、気持ちの面では求められていない。一方、ネガティブな発言が多かったのは出発から3か月後の5月であり、留学生も5月までに英語クラスで上級クラスに上がることが保育コースの条件であったり、またシェアハウスに移行する時期と重なることで、多くのストレスがかかっていると考えられる。またこの時期になると留学初めからある一定の期間が経過し、孤独の時期であるのも影響を与えていると考えられる。精神面のサポートが最も必要であるのは、おそらくこの時期であると思われる。可能であれば対面談を行ったり、英語学習、生活面でのサポートと精神的サポートの双方が必要な時期であると考えられる。留学して3か月の時期に来る大きな精神的局面をどうやって乗り越えるか、大学としても配慮が必要な時期といえる。6月からは学生が保育コースに移行し、シェアハウスにも慣れることで、語りの内容もポジティブになっていった。Uカーブ仮説の回復期を迎えたと考えられる。引き続き精神面でのサポートは望まれるものの、5月期ほど逼迫した状況にはないと考えられる。この時期から卒論指導など日本の単位取得のための指導も開始することが望ましい。対面談ではオンライン面談では話せない学生の表情を見て、お互いの語りが増えることが分かった。この対面によって増える語りの中で、些細な生活面でのトラブルを共有できる。生活面での問題が大きなトラブルに発展するまえに収拾できることから、対面談が与える影響は大きい。9月期にはすでに帰国を意識している学生に対し、就職面、卒業面でのサポートが望まれ、この時期からは精神的サポートよりも日本に帰国した後の就職や卒業論文のサポート等を意識した援助が必要とされる。

II-3. SEQを活用した効果検証

1. 目的

学生は留学出発前にSEQ(後述)を受診した。その結果、留学予定学生は対照群である一般学生と比して10ポイント以上高得点だったのは、「自己コントロール」「気力充実感」「セルフ・エフィカシー」「柔軟性」であった(松崎・石川・本多, 2023)。「自己コントロール」は、ハイスコアであるほど自分の感情をコントロールし感情を表に出すことが少ない。「気力充実感」は高得点なほど毎日の生活が楽しく充実感を得ることが多い。「セルフ・エフィカシー」は何をするにも“自分ならできる”という信念が強く自信をもって取組ことができる力である。「柔軟性」は自分と異なる意見ややり方を柔軟に受け入れることが多く、ルールや既存の概念にとらわれることが少ないことを示す。特に「セルフ・エフィカシー」や「柔軟性」において留学予定者が対照群に比べて高く、この強みを生かして留学生活を乗り切ることが期待でき

ることと、一方で「抑鬱性」については対象群よりもむしろロースコア（くよくよ考える傾向が強い）であり、自責と他責を整理しながら自助努力が求められることを考察した。

EQ (Educational Quotient=感情指数) は、「心の知能指数」と意識され、IQ (Intelligence Quotient=知能指数) に対比した概念として説明することができる。IQ が知能の水準あるいは発達を測定した検査結果を表すのに対して、EQ は他人の感情を感じ取る能力と自分の感情をうまくコントロールし利用する2種の能力といえる。仕事への取り組み姿勢や人間関係への関心の度合いなどを「感情」という視点から評価するものであり、職場内での健全な関係構築やコミュニケーションのためにEQを重視する企業もある。EQが高い人は相手の気持ちを敏感に察し、自分の気持ちをコントロールして人に接するため無用な衝突を生むことはなく、人間関係を円滑に育む特徴も持っている。

EQは、米国の心理学者 Peter Salovey と John, D. Mayer によって1990年に提唱された理論である。学生EQセンター（2022）によれば、EQを「自分と相手の感情に目を向け、それをうまく調整することで問題解決やコミュニケーションに利用する能力」と定義している。奥山（2017）は、留学は学生達が日本での日常とは異なる新たな環境に学習の場に身を置き、学業を含めさまざまな経験を積み、個人の価値観のパラダイム変換を含めた広義の心の成長、人間の成長が促進される貴重な教育の機会である、と述べておりこれは筆者らの思うところと一致している。

EQ教育については、谷口ら（2012）と小松ら（2016）が、徳山大学においてEQを高めるために新入生に対して合宿形式で9年間継続したプログラムを通して、効果測定のための尺度開発について報告している。武知ら（2020）は、海外研修に赴いた学生と海外研修に赴かない学生を比較対照群としてSEQを実施し、その結果から4因子「他者との共生への努力」「社会への積極的な対応」「他者への共感」「失敗への不安」を抽出し効果検証方法を提案している。

また、名古屋短期大学専攻科では、2017年度にSEQを活用して「留学タイプ」（20名）と「国内タイプ」（20名）の受診結果を比較し、留学タイプは留学前の時期から日々の生活の充実感を実感している人が多く、留学を含む目の前の物事に明るく前向きに取り組む姿勢が窺えたこと。さらに留学後では、従来感じていた充実感に加え、自分に対する自信や肯定的な考えをする行動量が大きく増加し、留学経験が学生を一回りタフな人間に成長させたことが窺えると報告している。（大学生協学生センタースチューデントEQ HPより）。

本学が実施する保育留学プログラムにおいても、EQの2大要素である「他人の感情を感じ取る能力」と「自分の感情をうまくコントロールし利用する能力」は非常に重要であり、学生一人ひとりが自らの「強み」と「弱み」を把握し、自律的な成長サイクルを育むための指標としてSEQを活用することとした。大学生協学生EQセンターによれば、SEQはEQ理論提唱者の監修を受けて開発された日本で唯一の大学生向けEQ行動特性検査であり、「3つの知性」（①心的知性、②対人関係知性、③状況判断知性）と、それに属する「8つの能力」（①の構成能力：自己認識力・ストレス共生・気力創出力、②の構成能力：自己表現力・アサーション・対人関係力、③の構成能力：対人受容力・共感力）、及びこれらの能力を生み出す24種の素養から構成されている。詳細については前掲論文（松崎・石川・本多，2023）で報告した。

2. 方法

2023年10月末に、保育留学中の学生5名と2022年7月に調査協力を得た一般学生15名に対してSEQ受診を実施した。SEQの質問項目は上記24種の素養に基づき250問から構成されており受診には30～40分間を要した。受診前にはゼミ担当教員よりその目的と方法について説明し、受診については自由意思であることを伝えた。実施方法はWeb上で、各自のペースに合わせつつ期間を限定して行った。各回答は学生EQセンターで集約され、実施責任者に報告されると同時に、各学生へ分析結果がフィードバックされた。

3. 結果と考察

第1回（2022年実施）と第2回（2023年実施）を比較すると次の結果が明らかになった（図8）。7ポイント（以下、pと表記）以上上昇したのは、上位から「セルフ・エフィカシー」（自分の知識や能力に自信を持ち、「自分ならできる」と考えているか「達成動機」（困難な目標の達成に向けて、粘り強く意欲的に取り組んでいるか）（+8.3p）、「楽観性」（ポジティブシンキング、割り切り、物事への肯定的な予測を行っているか）（+8.0p）、「ストレス対処」（ストレスに対し、適切な処理行動をとっているか）・「特性不安」（現在や将来の出来事に対する不安や心配を感じることなく自分を見つめているか）（+7.3p）、「気力充実度」（毎日の生活に充実感を得ているか）（+7.2p）であった。「気力創出力」に含まれる4要素（セルフ・エフィカシー、達成動機、気力充実感・楽観性）が全て伸びている。「気力創出力」とは“ポジティブな感情を自ら作り出し、それを活用し維持し続けること”をさす。この精神状態の中には、自信や自尊心、やる気などが含まれる。一方、得点が減少したのは「感

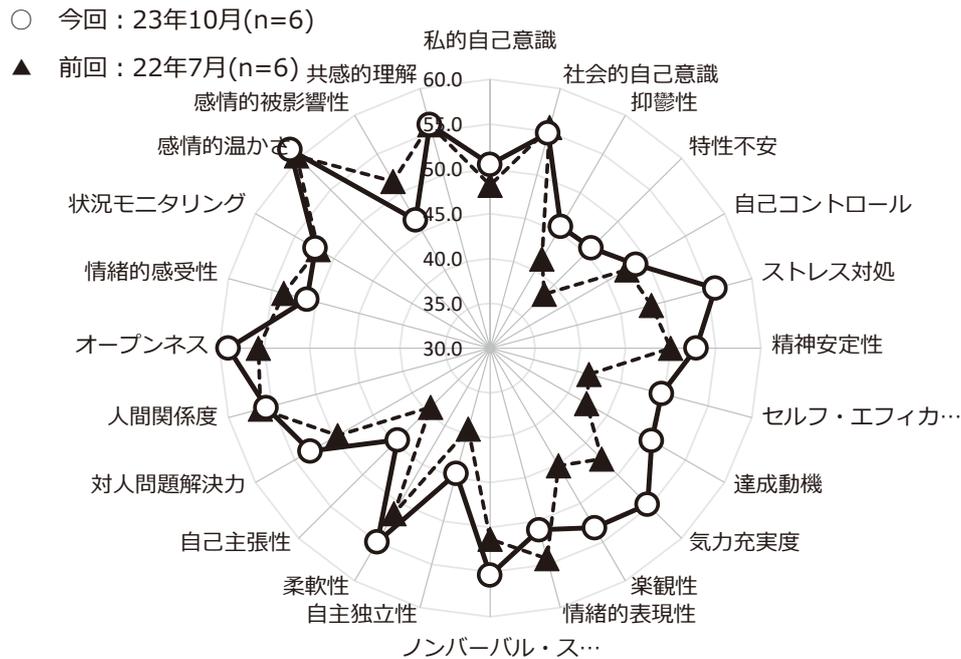


図8 保育留學生の出発前と留学8ヶ月経過後のSEQ結果

情的被影響性」(周囲の状況や他者の感情に影響を受けることが多いか) (-5.0p)、「情緒的表現性」(怒りや喜びなど自分の感情を相手に表現し、伝えているか) (-3.3p)「情緒的感受性」(相手の気持ちを敏感に察知しているか) (-2.7p)であった。

これらの結果について、学生EQセンターからのコメントを踏まえてまとめると次の通りとなる。第1回と比べて全体的に行動量が増えている。物事に対して自信をもって取り組んでいる点や目標に向かって意欲的、積極的に行動している様子が伺える。人間関係においては自分から心を開き、積極的にコミュニケーションをとり、相手に対しても気遣いや温かみのある接し方をしている様子も見られる。また、前回に比べて主体的に行動することや自分の意見を相手に伝えること、臆することなく新たなことへ取り組むこと、過去を引きずらずポジティブに捉えようとする面も増えている。人の感情に影響を受けることも少なくなった。これは、他人の感情に配慮するより優先することがあった可能性が高い。さらに、「特性不安」(上述の通り)も行動量が増えており、現在や将来のことに対して必要以上に不安や心配を感じることなく、積極的にさまざまなことに関わろうとする傾向が増していることが示された。

第1回と比較して4ポイント以上上昇したのは、主に「オープンネス」(相手にこころを開いてもらうために、自分からこころを開いているか) (+4.6)と「人間関係度」(周りの人と積極的に関わろうとしているか) (+4.1)であった(図9)。

第1回と比べて第2回の結果は全体的に行動量が増え、人間関係においては自分から心を開き、積極的にコミュニケーションをとり、相手に対しても気遣いや温かみのある接し方をしている様子が見られる。また、前回に比べて自分の感情や行動を振り返る行動も伸びており、自分の感情を調整することができるようになっている。1年前の受診以降での経験や体験したことがその後の行動変化につながっていると考えられる。

最後に、保育留學生と一般學生の第2回SEQの結果を図10に示す。留學生が一般學生より高い項目は主に3つであった。1つは「精神安定性」(気持ちを安定させ、落ち着いて行動しているか)で差は7.1p、「自己コントロール」(自分の感情を調整しているか)で差は7.1p、「ストレス対処」(上述の通り)で差は5.4pで、留學生の方が高得点であるという結果を得た。一方、「感情的被影響性」(上述の通り)が一般學生の方が8.1p高い。この項目は第1回には留學生は51.5点、一般學生53.3点で差は2p未満であったが、この1年間で留學生が46.5点となり、一般學生が54.6点と増加したためその差が広がった。

図8で示したように、一般學生も1年間のさまざまな体験のなかで確実に伸長が見られるために、全体としてほぼ同点の項目も多いが、保育留學経験を通して、他人の感情に影響を受けることも少なくなり、自分のコントロールしながら自分の感情や考え・行動を調整する力が伸長し目標に向かって進む力が伸長していることが各数値に表れている。

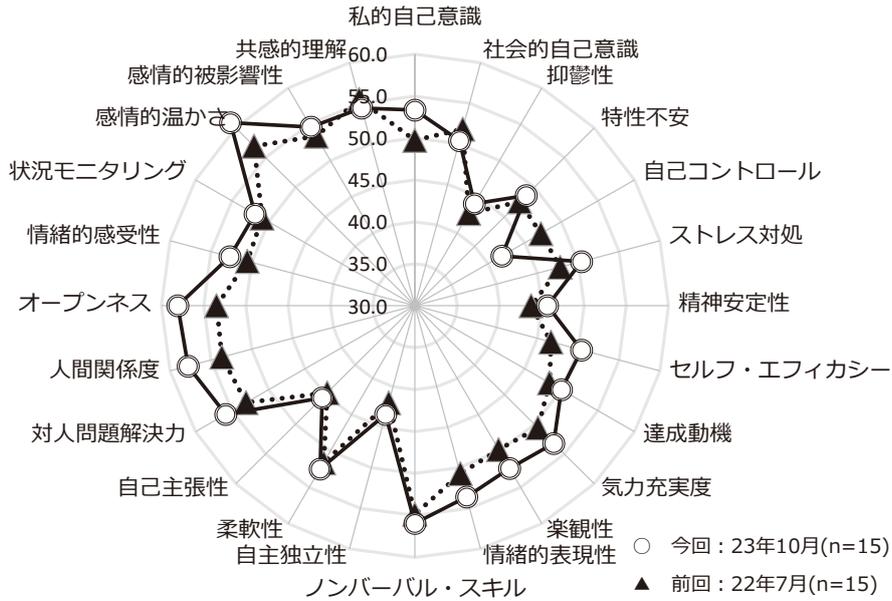


図9 一般学生の第1回と第2回のSEQ結果

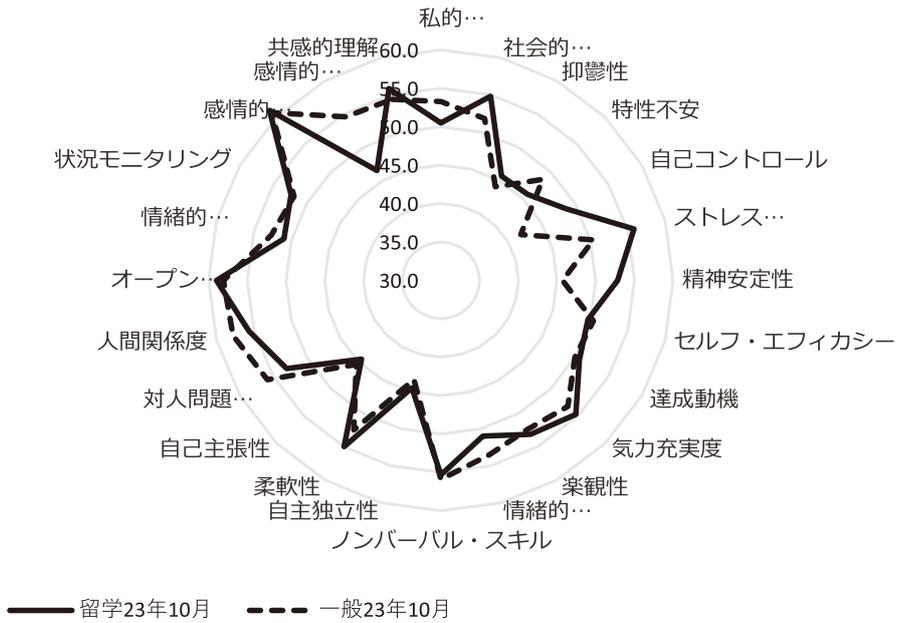


図10 留学生と一般学生の第2回SEQ結果の比較

IV 総合考察～今後に向けて～

本稿の目的は、オーストラリアにおける11か月間の保育留学中の学生へのインタビュー調査から出てきた言葉とU曲線との関係を検討し、また、SEQの留学前と留学中の得点比較を通して保育留学による学生の精神的変化と成長を検討することである。その上で、海外保育留学の意義とその教育的効果を検証することである。

学生の6か月間の個別インタビューは、保育留学生在が抱える気持ちの変化を明らかにした。留学初期の総頻出

語数の多さは留学月数が増えるごとに少なくなっている。それは学生が不安に思うこと、語らなければならないことが少なくなっている事を示している。一方、対面談ではやはり総頻出語数が増加し、顔を合わせる面談だからこその「語られなかった語り」を生むことができるのも、教員による訪問面談の良さであることが明らかになった。

Lysgaard, S.によるU字仮説と共起ネットワークを重ねると、総頻出語数だけではわからない学生的心情変化も分かった。留学開始直後は学生の語りから見られな

かったネガティブな発言が、留学2か月目から散見し、3か月目の5月には多くを占めるようになる。その後4か月目からはポジティブな発言に移行していくことで、学生の心的ストレスが最も多い時期が5月(留学3か月目)にあたるのが明らかになった。全ての学生が同じような変化を辿るわけではないが、大学側は留学派遣をする上で、学生の心情変化を理解し、どの時期にどのようなサポートが必要であるか考える必要がある。留学初旬から心的なサポートを多くするよりも、初旬には生活面のサポートを行い、2-3ヶ月目は学生のストレス状態を考慮し、精神的なサポートを行う配慮が必要となる。

インタビュー調査(個別面談)を通して、各学生の日頃の性格特性や行動特性は、留学先ではより色濃く出ることが明らかになった。とくに、留学初期のホームステイ期間を終えて学生達が自活する共同生活に移行した時期は、仲間意識が強まると同時に独自性が顕在化する様子が見受けられた。とくにその時期は、語学コースの要求水準をクリアして保育コースに移行する節目とも重なり、学生の中には強いストレスを抱えたものもいた。その中でも、留学生間の協力関係は非常に重要であった。この仲間関係の構築は、留学前準備学修においても強く意識して指導に当たったが、今後もこの留学制度を継続するに当たって大きなポイントになることが示唆された。

今回の研究を通して、保育資格取得という明確な目的をもった留学期間を通して、学生達は精神的にも大きく成長することが明らかになった。SEQ得点の伸びからは、目標に向かって意欲的、積極的に行動している様子や、人間関係においても臆することなく自分から心を開き、積極的にコミュニケーションをとり、相手に対しても気遣いや温かみのある接し方をしている様子が見られた。但し、今回の結果は今年度の留学生による結果に限定されたものであり、これらの効果検証は今後も継続的に実施し全体の傾向を見ていく必要がある。また、今後は保育留学を経験した学生の異文化理解、行動傾向、英語力の変容についても引き続き調査し、精神的変化・成長のみならず、海外保育留学が学生に与える効果を多面的に検討していきたい。

参考文献

- 大学生協学生EQセンター(2022). スチューデントEQハンドブック第6版.
大学生協学生センター. スチューデントEQ. <https://seq.univcoop.or.jp/> (2023年10月20日閲覧)
学校法人河合塾(2018). 日本人の海外留学の効果測定に関する調査研究. 平成29年度文部科学省委託事業. 平成30年5月調査研究
川岸久也・武内治郎・坂上優(2014). 短期留学とメンタル

- ヘルス. 京都大学国際交流センター論攷. 第4号, 55-61
小松佐穂子・岡野啓介・石川英樹(2016). EQ教育の効果測定のための尺度開発. 日本認知心理学会発表論文集. 118. 日本認知心理学会
長能峻・松本大和・岡野志保・梶原明子・今井智恵(2009). 若者の海外旅行離れについて 対策に向けた企業への提言. ISFJ 政策フォーラム2009年発表論文.
林千賀・鈴木理恵(2017). 海外語学短期留学がもたらす効果の持続性. 関東甲信越英語教育学会誌 第31号, 15-28
Lysgarrd, S. (1955) "Adjustment in a Foreign Society: Norwegian Fulbright Grantees Visiting the United States" International Social Science Bulletin, 7, 45-51.
松崎真実・石川悦子・本多舞(2023). 海外保育留学とその準備期間の教育的効果の検討. こども教育宝仙大学紀要 14, 91-99.
奥山和子(2017). 留学経験がもたらす効用としての自己効力感の形成プロセス—質的研究手法を使って—. 神戸大学大学教育研究. 第25号, 83-101.
太田浩(2014). 日本人学生の内向き志向に関する一考察: 既存のデータによる国際志向性再考. ウェブマガジン留学交流, 2014年7月号. https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2014/_icsFiles/afieldfile/2021/02/18/201407otahiroshi.pdf (2023年10月20日閲覧)
武知薫子・酒匂康裕・服部圭子(2020). EQ指標を用いた留学の効果検証方法—質的研究の探索補助としての量的研究の提案—. 近畿大学教養・外国語教育センター紀要. 外国語編11, 1-19.
谷口満紀・笠原智穂・ト部匡司・石井拓(2012). 質問紙による大学生のEQ診断に関する実証的研究. 徳山大学叢 73, 1-9, 徳山大学経済学会.
横田雅弘・白土悟(2004). 留学生アドバイザー—学習・生活・心理をいかに支援するか—. pp.128-129, ナカニシヤ出版